

理論と実践の融合

7

ビジネスの現場では専門知識が不可欠。だが、経営やマネジメントは総合的・学際的な知識や理論が必要となる。この両方を備えたT字型、またはΠ(パイ)字型と呼ばれる人材を育成しているのが専修大学経営学部だ。その教育理念は「理論と実践の融合」。現役ビジネスマンにとっても、なかなか魅力的な内容なのである。

まず最初に
「夢」を語ろう！

終身雇用と年功序列賃金を基本とする日本型経営は、長期不況を経てほとんど崩壊したといっている。苛烈な成果主義が一時期もてはやされたが、これは両刃の剣であり、運用を誤って職場全体の士気を低下させた実例もある。日本の経営環境に対して成果主義の理論をそのまま導入してよいのか。

労務管理論を専門とする、専修大学経営学部の廣石忠司学部長は、そんな疑問に対して次のように語る。

「確かにここ10年、企業における人事面での変化は激しい。成果主義が導入されたと思えば、今度はアンチ成果主義。では年功序列に戻るのかといえば、もはや無理でしょう。解決策は成果主義の考え方と運用にあると思います」

廣石学部長の解説は最後に紹介するが、専修大学経営学部では「理論と



経営学部長
廣石 忠司

実践の融合を教育理念として、2007年度からカリキュラムを一新する。

「企業の中核を担うことができるT字型、Π字型人材の育成が目標。タテ棒は専門性、ヨコ棒が経営管理やマネジ

メントといった総合力を表現しています。新カリキュラムはそれを現代的に強化したものであり、専修大学の21世紀ビジョン「社会知性」を学部で反映させた具体例となります。合言葉は「社会で輝く力を育てる」です」(前学部長・奥田勝臣教授)

このカリキュラムは実践力につながる演習科目群と、理論科目群に大別さ

れている。まず演習科目群では、入門ゼミがスタートとなる。「経営学は夢を語る学問だと考えています。企業だけでなく、行政や学校、NPOなどすべての組織が経営学の対象となります。経営はアートであり、ロマン。夢を語らない経営者は魅力がありません」と廣石学部長は熱く語る。

現代の要請に対応した10のテーマ制

次に「社会に出てから役立つ四つの武器」として、論理説得力、情報リテラ



前経営学部長
奥田 勝臣

シー(コンピュータ)、経営数学(数学を用いた意思決定)、簿記(会社分析の基礎)の基礎演習科目が続く。その上で3年次から本格的な演習に入るのだが「朝の9時から夜の9時まで12時間に及ぶこともあります」(大曾根匡教授)というゼミもあるから半端ではない。

「ゼミは大学教育のエンジン。これをやり通すことが学生の實力になるので、教員も絶対に手を抜かないのが伝統なのです」

一方の理論科目群は10のテーマ制となっており、学生はの中から2テーマを選択する。これがT字、Π字におけるタテの専門性につながるわけだが、なかなか興味深いので、すべてを紹介しておきたい。

企業と市場・社会／ベンチャー創造と事業継承／戦略デザイン／グローバル・マネジメント／企業評価とファイナンス／企業活動と会計情報／顧客満



経営学部 教授
大曾根 匡

足とマーケティング／ビジネス・ソリューション／人的資源と知識創造／ITプロフェッショナル。

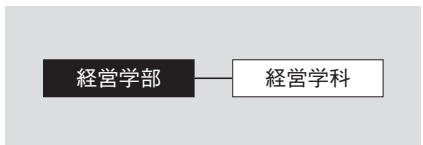
現役ビジネスマンでも受講したいようなテーマが揃っているのである。

実務経験を持つ教員が多いことも経営学部の特徴だが、その人脈を活かして学外から講師を招いたり、企業からの提供講座も充実している。

「私の講義は労働組合の役員を招くこともあるのですが、学生が活発に遠慮なく質問するので、苦笑させられることもありますよ」(前出・廣石学部長)

大手広告会社との共同研究や、他大学の学生と一緒に調査を行うこともあるという。

「私の広告論のゼミナールでは、とにかく課題を与えて学生を外に出すことにしています。その一環として、大学生意識調査プロジェクトに参加。毎年テーマを決めて他大学の学生と共同調査・研究を行います。それをこなしただけで卒業はビカイチですね。マーケティング関連科目は近年になって学生の人氣が高いのですが、経営学や会計学など他の科目との関連性に重点をおいて指導しています」(石崎徹教授)



ちなみに卒業論として400字詰め100枚以上を求めるゼミもある。

「厳しいですが、それだけに学生の達成感、社会に出ていく上での大きな自信になります」(前出・大曾根教授)

こうした各科目の展開により、新カリキュラムは「学生の顔が見え、教員・学生相互に名前呼びあえる少人数教育」を目指したものとなっているのである。

丁寧な事前教育を行うインターンシップ

新カリキュラムでは、通常の授業で対応できない最新の話題を複数の教員がそれぞれの視点から講義する「ビジネス研究」などユニークな講義も多いのだが、1998年から実施されているインターンシップも独特。30人の学生に6人の教員が事前教育を行い、ビジネスマナーも含めて一人前になった段階で派



経営学部 教授
石崎 徹

Student Opinion

3年間で大変身。

学業とボランティアを両立



糠 美知代さん
(経営学科4年)

語学系の大学が第一志望だったので、入学式に出るのも嫌で、いっそ浪人しようかとも思っていました。それでも仕方なく授業に出てみると、先生が皆さん一生懸命で、学生に成長してほしいと考えていることがよく分かったのです。中でもコンピュータ概論は授業の準備が充実しており、何も知らない学生への配慮に感動しました。

1年次の秋にアメリカに短期留学し、自分がいかに恵まれているかを痛感させられたこともあって、帰国後は必死で勉強することにしました。規定単位以上に履修したい科目があったので、2年次には先生に直接お願いして、毎日1時間から5時間までずっと大学にいたくらいです。

3年次には皆で勉強する楽しさや喜びが分かるようになり、今は卒業制作中。大変ですが、丁寧な指導に感えられるような内容にしたいと張り切っています。

3年間で、自分でも成長できたと思えますね。勉強のほかにキャンパス・アシスタントとして留学生の面倒も見ていたのですが、その縁で大学の国際交流事務課から留学生寮に住み込んで手伝いをしてほしいと依頼されました。サブゼミに留学生を呼ぶなどの交流もありますが、外国人登録証や国民健康保険証の取得など細かなお世話も多いですよ。少しでも留学生と日本との架け橋になれば、と思って続けてきました。

とにかく、専修大学では本当にいろいろなことを勉強させていただきました。その経験からいえるのは、どんな理由であれ、入学したら、1年次の授業を真剣に受けること。そうすれば大学に対する見方がガラリと変わります。掛け値なしに、4年間で大きく成長させてくれる大学だと思います。(談)

遣するという。

「大手企業では一部門しか見えないこともあり、中小企業の方が勉強になるという側面もあります。中には役員に自分の提案をプレゼンテーションした学生もいて、感心されたこともあります」(前出・廣石学部長)

一言でいえば、初年次から卒業するまで、実に学生の面倒見のいい学部な

のである。最後に、冒頭の成果主義の続きを紹介しなければならぬ。

「短期の成果主義でなく、たとえば10年で区切るような長期の成果主義もあり得ます。要は成果をどのように測定するか。画一的ではなく、業態や会社によって、それぞれ様々な成果主義があつていい。それもまた理論と実践の融合ということではないでしょうか」